復活節第３主日礼拝説教「亡霊よりも焼き魚」予稿

日本基督教団石神井教会　2023年４月23日

【旧約聖書日課】イザヤ書　51章1～6節

1 わたしに聞け、正しさを求める人
主を尋ね求める人よ。
あなたたちが切り出されてきた元の岩
掘り出された岩穴に目を注げ。
2 あなたたちの父アブラハム
あなたたちを産んだ母サラに目を注げ。
わたしはひとりであった彼を呼び
彼を祝福して子孫を増やした。

3 主はシオンを慰め
そのすべての廃虚を慰め
荒れ野をエデンの園とし
荒れ地を主の園とされる。
そこには喜びと楽しみ、感謝の歌声が響く。

4 わたしの民よ、心してわたしに聞け。
わたしの国よ、わたしに耳を向けよ。
教えはわたしのもとから出る。
わたしは瞬く間に
わたしの裁きをすべての人の光として輝かす。
5 わたしの正義は近く、わたしの救いは現れ
わたしの腕は諸国の民を裁く。
島々はわたしに望みをおき
わたしの腕を待ち望む。
6 天に向かって目を上げ
下に広がる地を見渡せ。
天が煙のように消え、地が衣のように朽ち
地に住む者もまた、ぶよのように死に果てても
わたしの救いはとこしえに続き
わたしの恵みの業が絶えることはない。

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙一　15章50～58節

50兄弟たち、わたしはこう言いたいのです。肉と血は神の国を受け継ぐことはできず、朽ちるものが朽ちないものを受け継ぐことはできません。51わたしはあなたがたに神秘を告げます。わたしたちは皆、眠りにつくわけではありません。わたしたちは皆、今とは異なる状態に変えられます。52最後のラッパが鳴るとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は復活して朽ちない者とされ、わたしたちは変えられます。53この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを必ず着ることになります。54この朽ちるべきものが朽ちないものを着、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、次のように書かれている言葉が実現するのです。

「死は勝利にのみ込まれた。
55死よ、お前の勝利はどこにあるのか。
死よ、お前のとげはどこにあるのか。」
56死のとげは罪であり、罪の力は律法です。57わたしたちの主イエス・キリスト
によってわたしたちに勝利を賜る神に、感謝しよう。58わたしの愛する兄弟たち、
こういうわけですから、動かされないようにしっかり立ち、主の業に常に励みな
さい。主に結ばれているならば自分たちの苦労が決して無駄にならないことを、
あなたがたは知っているはずです。

【福音書日課】ルカによる福音書　24章36～43節

36こういうことを話していると、イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あな
たがたに平和があるように」と言われた。37彼らは恐れおののき、亡霊を見てい
るのだと思った。38そこで、イエスは言われた。「なぜ、うろたえているのか。
どうして心に疑いを起こすのか。39わたしの手や足を見なさい。まさしくわたし
だ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、
わたしにはそれがある。」40こう言って、イエスは手と足をお見せになった。41
彼らが喜びのあまりまだ信じられず、不思議がっているので、イエスは、「ここ
に何か食べ物があるか」と言われた。42そこで、焼いた魚を一切れ差し出すと、
43イエスはそれを取って、彼らの前で食べられた。

主イエスが真ん中に立って【こども説教のために】

イースターから数えて三週目の今日も、主のご復活を記念します。

主イエスが十字架で死なれたエルサレムを離れてエマオという村に向かっていた二人の弟子は、近づいてきた見知らぬ人と旅を続け、同じ宿に泊り、食事を共にしました。そして、そのときその人がパンを裂く様子を見て主イエスがそこにいらっしゃることが「**分かった**」と、仲間の弟子たちに伝えるために、大急ぎで戻って来ていました。すると、仲間の弟子たちも、シモン＝ペトロが「**本当に主は復活して…現れた**」と言っているというのです。

不思議に思いながら語り合っていた弟子たちがふと気付くと、彼らの真ん中に一人の人が立って言うのです、「**あなたがたに平和があるように**」。それは、主イエスに違いありませんでした。いつも聞いていた、主イエスの言葉でした。でも、いったい何が起こっているのでしょう。彼らは、自分たちが主イエスの「**亡霊**」を見ているのだと思いました。でも、その人は言うのです、「**手や足を見なさい。…わたしだ**」と。そして、その人は彼らが差し出した「**焼き魚**」を食べ始めたのです。

わたしたちは、死んだ方を墓の中に探したり、亡霊のようなものとして見ようとするかもしれません。けれども、ご復活されたお方は、手や足を見ることができ、肉や骨に触れることができる者として、現れてくださるのです。食事を共にしてくださるのです。そのような人の姿を見、共に食事をするとき、主イエスはわたしたちのただ中に現れていらっしゃるのです。

「平和があるように」と告げる者

日曜日の教会に招かれておいでの皆さん。わたしは今日、いつにも増して心を込めて、皆さんにご挨拶をしないわけにはいきません、「**わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように**」（Ｉコリ 1:3）と。弟子たちの真ん中にお立ちになられた主イエスが、「**あなたがたに平和があるように**」とお告げになられているのですから。

「**平和があるように**」と平和の挨拶をしてくださる主イエスが真ん中にお立ちくださる日曜日の教会に、わたしたちは招かれてきました。自分の意志でか、だれかに強いられてか、わかりません。けれども、わたしたちは、今日、確かに招かれて、集められて、ここに共にいるのです。わたしたちも、互いに「平和があるように」と平和の挨拶を交し合う者となるためです。

弟子たちの教会は初めから、日曜日に集まると、平和の挨拶を交し合うことを大切にしていたようです（Ⅱコリ 13:12）。現代の多くの教会でも、日曜日の礼拝の中で互いに「平和の挨拶」を交し合うことが大切にされています。

ここで、わたしは、主イエスがなさったように、皆さんに向けて平和の挨拶をいたしましょう、「あなたがたに平和があるように」と。皆さんにも、互いに「平和があるように」と平和の挨拶を交わしていただきたいからです。

「**あなたがたに平和があるように**」。その言葉を聞いて、あの集まっていた弟子たちは、それが主イエスの言葉だとすぐに気づいたのです。主イエスの教え、主イエスの為さったこと、主イエスの生き方、そのすべてがあの言葉に凝縮されている。弟子たちは、そう気づいたのでしょう。

それは、夢か幻か、亡霊か、あるいは思い込みではないのか。そう不安に思い、疑う者もいたはずです。それでも、弟子たちは、そのときからはっきりと確信をもって、一つの新しい生き方を始めました。「自分たちの人生の生き方の原点は、ここにある。主イエスにある」という確信です。

主イエスや弟子たちの生まれであるユダヤ人は、預言者に「**あなたたちが切り出されてきた元の岩、掘り出された岩穴に目を注げ**」と告げられたとき、迷わず、自分たちの父祖、族長アブラハムと妻サラを思い出していました。けれども、弟子たちは、あの日、アブラハムに優る、自分たちの切り出されてきた元の岩、掘り出されてきた岩穴を、見出したのです。主イエスです。主イエスの遺体が葬られていた墓の岩穴です。

主のご復活を記念するとき、わたしたちは、この岩穴を見ているのです。このお方の岩穴から切り出され、掘り出されてきた者。このお方をかたどって生きるようにされた者。このお方の教えと実践、その人生の生き方に倣う者。このお方を人生の原点とする者。そう、平和の挨拶を告げる者。そのような者になるようにと、わたしたちは呼び出されてきました。

この手や足を見て！

ご復活を記念するときを終えて、わたしたちは、再び、主イエスの教えやお働きそのものに目を向けていくことになるでしょう。「福音書」には、弟子たちが直接見聞きし、自ら倣い行った、主イエスの教えや実践が伝えられています。「使徒書」には、弟子たちが歩み始めた教会の中で、実際に主イエスの教えやお働きを自ら実践してみた結果、後世に伝え残さないではいられなかった事々が記されています。各自が自分の「聖書」を所持できる時代に生きているわたしたちは、何よりも、「聖書」を自ら開いて読み、そこから必要な教えや実践を学ぶことができるでしょう。

たしかに、「聖書」は特別な書物です。どこの書店でも入手できますから、キリスト信者でなくても、「聖書」を特別な書物として挙げる者は少なくありません。「永遠のベストセラー」とは、よく言ったものです。「聖書」一冊あれば十分ではないでしょうか。もはや、教会も必要ないのではないでしょうか。「聖書」一冊に比べたら、専従の牧師も、会堂の維持も、今の時代の人には「コスパが悪すぎる」のではないでしょうか。実際、専従の牧師を置かない教会があります。自前の会堂さえ持たない教会もあります。独り自宅で「聖書」を開き、黙想し、祈り、神を賛美すれば、それで十分。そこで、霊である神と対面し、霊的な主イエスとの交わりが得られる。そう考える人たちもいるでしょう。

けれども、弟子たちは、そうは考えませんでした。彼らは、ご復活の主イエスによって別のことを示されたと信じました。

「**わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしだ。触ってよく見なさい。亡霊には肉も骨もないが、あなたがたに見えるとおり、わたしにはそれがある**」。

弟子たちは最初、主イエスのご復活を霊的なことと考えたのです。**亡霊**のようなものとして、ご復活の主イエスを見ようとしたのです。けれども、彼らは、別のものを見るように促されました。手や足のある者です。肉や骨のある者です。事実見えて、触ってみることのできる存在です。それは、わたしたちのように、今ここに生きている者に他なりません。

それを「**見なさい**」と言われるのです。「**触ってよく見なさい**」と言われるのです。事実目の前に存在する一人の人、見て、触れることのできる人。共に焼き魚を食べることもできる存在。この人が、「**平和があるように**」と挨拶を告げるのです。この人が、「**わたしだ**」と言うのです。

その人と、互いに平和の挨拶を交わすように。その人と、食事を共にするように。その人と、共に生きるように。その人のために死ぬように。

今も、わたしたちは、そのようなところへと招かれているのです。